最後のおくり物

　ロベーヌの夢は、有名な劇団「アルベル」の俳優になることだった。地方から一人でこの町に出てきたロベーヌには、養成所に通う余裕はなく、自分なりの練習を重ねていた。ある日の夜、養成所がどのような練習をしているのかを知ろうと、窓ごしに中をのぞいてみた。あまりの練習の厳しさと熱心さにおどろき、ロベーヌは、思わず立ちすくんでしまった。
　それから、たびたび夜に窓の下で熱心にメモを取るロベーヌの姿が見られた。たまりかねて声をかけたのが、守衛のジョルジュじいさんだった。ジョルジュじいさんは、ロベーヌの話を聞き、
「本当なら許されないが、他の守衛仲間にも私から話しておくよ。」
と、言ってくれた。その日から、雨の日も風の日も、窓ごしに練習の様子を熱心に見入るロベーヌの姿があった。

　三か月ほどたった日の朝、ロベーヌは、アパートのドアの下に小さな紙の包みを見つけた。中には、養成所の月謝代に使ってください、という手紙と共に、何枚かのお札が入っていた。自分にこんなことをしてくれる人を、ロベーヌは思いつかなかった。翌月も、その次の月もおくり物は届いた。
「お金をそのまま受け取ってもよいものでしょうか。だれが送ってくれるのか探したんですが分からないんです。」
　思いあまって、ロベーヌはジョルジュじいさんに相談してみた。
「きっとあなたに期待をかけている人なんだろうね。このお金は今借りていると思えばいいじゃないか。無駄にしないように頑張ることだね。」
　そう言った後で、
「あっ、そうそう私は今度、昼間の勤めに変わることになったのでね。しばらく会えなくなるけど、くじけちゃ駄目だよ。」
と言って、やさしくほほえみかけた。

　養成所に通い始めたロベーヌは、一生懸命に練習に取り組んだ。日に日に実力を身につけ、先生や仲間からも次第に認められるようになってきた。ロベーヌは、いっそう練習に力が入った。
　ところが、しばらくして突然おくり物が届かなくなった。次の月も、その次の月も、やはりおくり物は届かなかった。はらえない月謝がたまり始めた。
「せっかくここまできたのに・・・。」
　ロベーヌは、思わずくちびるをかむのであった。

　そんなある日の夜ふけに、とびらの外にかすかに人の気配がした。そっと玄関の方をのぞくと、雪明りの中にかがみこんで何かを置いている人影が見えた。
「ジョルジュじいさん・・・。」
　ゆっくりと起き上ったその顔が見えたとき、ロベーヌは息を飲んだまま、その場を動くことができなかった。ジョルジュじいさんは、立ち去ろうとしたが、その様子がおかしい。と思う間もなく、雪の中にたおれこんだのである。
　ロベーヌは外へ飛び出した。かけ寄ってみるとジョルジュじいさんは苦しそうに息をしていた。ひどい熱。ロベーヌは、だきかかえて自分の部屋に連れて行き、ベッドに寝かせると、急いで近くの病院に向かった。玄関のわきには、見慣れた紙の包みがあった。

「難しい状態です。大分衰弱してますから。とにかく、だれか付きそいが必要です。」
　医師がそう言ったとき、来ていた仲間の守衛たちが顔をくもらせた。
「体をこわして休んでいたのに、また無理して働き始めたからだろうね・・・。困ったなあ、このじいさんには身寄りがいないんだ。」
と、だれかが言った。
　付きそいとなれば、仕事を休まなければならない。ロベーヌは、しばらくうつむいていた。が、きっぱりと言った。
「ぼくが付きそいます。息子なんです。」
　それからは、付きっきりで、ねむり続けるジョルジュじいさんの看病をした。しかし、体は日に日に弱っていった。
　三日目の夜、ジョルジュじいさんは、かすかにほほえみながら、ロベーヌに小さな声で語りかけた。
「めいわくをかけることになって悪かったね。」
「そんな・・・。」
「息子だと言ってくれたんだね。」
「そんなことより、ぼくのためにこんなに苦しむことに・・・。」
「ちっとも苦しくはなかったよ・・・、幸せを感じたくらいだ。」
　どこまでも気づかってくれるジョルジュじいさんの言葉に、ロベーヌはかたをふるわせた。
「ぼく、おじいさんにあやまらなければ。・・・お金が届かなくなったとき、ぼくはうらみました。本当におろかでした。どんなに苦しんでいたかも知らないで。許してください。・・・でも、どうして見ず知らずのぼくなんかに。」
「私も俳優になりたかった・・・。君の姿を見ていて・・・。ありがとう、頑

張るんだよ・・・。」
　ジョルジュじいさんは、そう言うと、ロベーヌの手をとったまま、またねむりについた。それからしばらくして静かに息を引き取った。

　その夜、ロベーヌはジョルジュじいさんからの最後の手紙を取り出し、もう一度読み始めた。

　おくれていたお金を入れておきます。もうすぐ、劇団の新人募集の試験がありますね。私は心よりあなたの努力が実ることを願っています。あなたの初舞台を一日も早くみられることを心待ちにしています。

　手紙の文字がなみだでかすんだ。その中に、ジョルジュじいさんの語りかけるようなやさしい笑顔がうかんできた。
　ロベーヌは、何かを決意したかのように、遠くに視線を移すのだった。

私たちの道徳　小学校五・六年